

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2013.12) 平成24年度:57～59.

進行がんで化学療法を繰り返す患者と関わる看護師が抱く思いについて

前田 裕美 畠山 沙織 瀬川 澄子

進行がんで化学療法を繰り返す患者と関わる看護師が抱く思いについて

旭川医科大学病院 前田 裕美 畠山 沙織 瀬川 澄子

【目的】進行消化器がんは年々増加し、繰り返し化学療法をしている患者も多い。ガイドラインに基づき多種の薬剤を使用し生存期間も延長している。がんサバイバーと治療効果を期待できないベストサポートケアにいたるまで、看護師の患者との関わりから抱く思いについて明らかにする。【方法】外科病棟に勤務する部署経験年数2年以上の看護師を対象に半構成的面接を行った。分析は、逐語録を作成し対象者の思いをコード化しカテゴリー化した。【倫理的配慮】研究の趣旨・目的及び方法を口頭で説明し同意を得た。【結果】対象者は4名、面接時間は30分であった。157のコード、4つのカテゴリーを抽出した。看護師は、「最初から最期を見据えた情報を得ることが難しい」、「予後についての思いの介入が難しい」と《がんの診断を受け生き続ける人々への支援の困難感》を抱いていた。関わりから「時間をかけ患者と向き合いたい」、「コミュニケーションスキルの不足を感じる」、「頼られる言葉で喜びと不安な気持ちになりより力を入れる」《担当看護師としての責任感と葛藤》があった。進行がん患者との関わりで、「治療中の有害事象における日常生活指導を強化したい」《治療継続を維持できる支援》があった。看護師は、経験や学習から《病期から最期を予測し向き合う必要性》を強く持ち「治療継続と共に残りの人生の支えになりたい」と思いがあった。看護師は、進行がん患者と関わる中で、患者の病期から予測される経過を意識し、サバイバーとして捉えた患者に寄り添えるような看護を提供したいという思いを抱いていた。【考察】看護師が抱く思いは、進行がん患者を向き合うことでの責任が大きく葛藤を抱きやすいと考える。チームとして情報を共有し関わっていくことが必要である。

進行がんで化学療法を繰り返す患者と 関わる看護師が抱く思いについて

旭川医科大学病院

前田 裕美 畠山 沙織 瀬川 澄子

I . 研究目的

進行消化器がん患者は年々増加し、繰り返し化学療法をしている患者も多い。

ガイドラインに基づき多種の薬剤を使用し生存期間も延長している。

周術期からベストサポーターティブケアに至るまで患者と関わる看護師が、進行がんで繰り返し化学療法を施行するがんサバイバーと関わる中で抱く思いについて明らかにする。

Ⅱ．研究方法

- 研究デザイン 質的記述的研究
- 対象
研究に同意を得た外科病棟に勤務する部署経験年数2年以上の看護師4名
- データ収集方法
半構成的面接法を用い、面接内容は録音し逐語録を作成し、質的データとした。
- データ分析方法
面接内容を意味・類似性に従い、一文一意味をコード化し、カテゴリー化を行った。カテゴリーから主要カテゴリーを抽出した。
- 倫理的配慮
研究の趣旨・目的及び方法を口頭で説明し、同意を得た。

Ⅲ. 結果

【対象者の概要】

- 年齢: 23～27歳
- 部署経験年数: 2～4年
- がん看護に関連する研究や研修受講経験者: 3名
- 消化器がんStageⅣ患者受け持ち経験看護師: 4名

【データ結果】

- 面接時間: 平均45分
- データから157のコード,
- 18のサブカテゴリー, 4つのカテゴリーを抽出した。

カテゴリー1

がんと告知を受け生き続ける人々への支援の困難感

【4つのサブカテゴリー】

業務と関わりのはざままで揺れる気持ち	患者個々のニーズを把握する難しさ
周手術期の患者がいる中で関わるのが大変	自立した患者が何を求めているのかが分かりづらい
短い入院期間でゆっくり関われない	思いを表出しない患者への介入が難しい
有害事象が持続している患者との介入の難しさ	短期入院による関わりの難しさ
今後続く治療に対する不安が増強しているのではないかと感じる	短期で信頼関係を構築することが難しい
有害事象のモニターを最優先としている	担当看護師以外は経過が見えにくい
	退院後自宅での様子が見えにくい

カテゴリー2

担当看護師としての責任感と葛藤【4つのサブカテゴリー】

コミュニケーションスキルを磨きたい思い	終焉をみすえた看護に身構える気持ち
自分のコミュニケーションスキルの不足を感じる	死が身近であり、受け持ちとして何かしなくてはならないと思う
その人の言った些細な言葉に大きな意味をもつと後で気づく	治療を淡々とこなせばいいとは思わない
患者ともっと向き合うために、コミュニケーションスキルを磨きたい	自分が関わっていいのだろうかと不安を感じる
受け持ち看護師としての責任感	思い描く看護に近づけないもどかしさ
患者に頼られる言葉で喜びと不安な気持ちになり、より力を入れる	何かをしたいけど、何をしたらよいか明確化できない
診断・手術から現在までの経過をみており、自分が一番患者さんのことを知っている	毎回時間をかけて関わりたくても、そうはいかない
	何をしたらいいのか分からず答えを求めてしまう

カテゴリー3 治療継続を維持できる支援 【6つのサブカテゴリー】

安全に治療ができる環境	長期にわたる精神的な支持
安全に治療することが大切な看護	自分の声掛けが患者さんへの励ましになっていると感じる
抗がん剤の副作用を恐ろしいと感じる	慣れた環境で治療できるということが、患者さんへの安心感につながっている
安全に治療ができるようマニュアルがあると安心	学習をしてその人の存在証明のためのケアも必要と思った
セルフケア能力を維持できる支援	治療選択の意思決定への支援
ある程度生活を変えてでも治療ができるんだと思えるようにしたい	医師の説明と受け止めにずれがないかを確認したい
有害症状をコントロールしていくことが大事	毎回の治療の意味を確認しなくちゃと思う
これなら生活していけると思えることが負担がないと思う	治療継続や中断のICの際には、そばに看護師がいたい
副作用を少しでも体の面でおさえてあげたい	

カテゴリー3 治療継続を維持できる支援 【6つのサブカテゴリー】

その人らしさを尊重した生活支援	他職種と協働したチームづくり
その人の役割と生活のバランスをみている	自分が関わり記録やカンファレンスでチームにつなげたい
その人の生き方や価値観に触れ、そこを支えたい	他職種と連携し、 看護師の役割を発揮したい
治療で生活を変容することになっても、その人らしさは大事にしたい	

カテゴリー4 病期から最期を予測し向き合う必要性 【4つのサブカテゴリー】

患者との関わりの中で がんサバイバーを支えたい思い	病期からみえる患者のたどる経過
<p>患者が人生の中で治療をし、 闘っていると感じ支えたいと思う 次の治療をする意味が 患者さんにはある</p>	<p>研修や学習から、自立した人もいつか できなくなることが増えていくと分かる 最期の時まで頑張るといふ、 その人の生き様を感じる 経過が見えることで、いつかくる最期 の時期を予測している</p>
病期を理解し見えた看護	今を生きる患者と先をみすえた 医療者が関わる上での葛藤
<p>治療継続と共に、 残りの人生の支えになりたい</p>	<p>何がしたいかを聞き出すのではなく、 人生の背景や価値観を理解し、 関係性の中から実践していく看護がし たい</p>
<p>患者さんの残された時間をどう生きる か具体的に希望を聞き実行したい</p>	<p>患者・家族は今を生きているから、先 を想像できないが、 私は先をみすえてしまう</p>

IV. 考察

・看護師は進行がん患者と関わる中で患者の病期から予測される経過を意識し、サバイバーとして捉えた患者に寄り添えるような看護を提供したいという思いを抱いていた。

・その思いは、学習や経験を重ねる上で強くなっている。担当看護師として責任を持って関わる中で、困難感や葛藤をより強く感じ、責任感から一人で抱えやすい傾向がみられた。個々の看護師が抱く思いをチームで共有することで、チーム全体で患者の個別性を重視した看護を考える機会につながるのではないかと考える。

V. 結論

1. 進行がんで化学療法を繰り返す患者と関わる看護師が抱く思いは、《がんと告知を受け生き続ける人々への支援の困難感》,《担当看護師としての責任感と葛藤》,《治療継続を維持できる支援》,《病期から最期を予測し向き合う必要性》の4つのカテゴリーが抽出された。

2. 進行がん患者と関わる看護師が抱く個々の思いをチームで共有することで、個別性を重視した看護を考える機会となる。

参考文献

- ・濱田珠美;北海道におけるがん化学療法看護ケア実践での困難と学習ニーズ-第1報-,看護総合科学研究会誌,10(2),57-68,2007
- ・赤羽寿美;特集がんサバイバーへの看護,日本看護協会出版会,ナーシングトゥデイVol.19 No4 P18-31, 2004
- ・外来癌化学療法とチーム医療,外来癌化学療法,1(1),P9-15,2010